

“本・冊子”は人をつなぐ

～小冊子 zine（ジーン）、独立系書店など、新しい潮流から～

取材 いとう啓子



いとう啓子（いとう けいこ）

東京都出身。建築関係の業界誌を経て、2輪ロードレース専門誌で編集を務め、雑誌廃刊後フリーランスに。以後、小学館など出版社や企業の広報誌などで、編集、ライターとして、書籍、雑誌など幅広い仕事を経験。30年ほど前から社会教育誌にライターなどの仕事で参加し、現在はライター、DTPに加え、ホームページも担当している。2019年に個人的にアネスト出版を立ち上げ、主に社会教育・生涯学習、地域活動の関係者向けに、自費出版支援、小冊子づくり、広報支援などを行っている。
著書「猫と鐘 マルタ留学記」アネスト出版 <https://www.a-nest.net/> zag107@gmail.com

ここ数年、ICT技術やAIの影響で人々の生活はすっかり変わってしまった。スマホからさまざまな情報を得る、SNSで人とつながる、生成AIで文書やイラストも作成できる。このような状況のなかで、本や冊子など紙媒体の存在感は薄れつつある。

しかし、逆行するような動きも出てきた。zine（ジーン）と呼ばれる小冊子が若者に大人気だという。また、居場所的な新しいタイプの本屋も増えている。

今回、取材を通じて、紙媒体にも大いなる可能性があることが見えてきた。新たなコミュニケーション、まちづくりへとつながられる本・冊子の可能性について考えてみたい。

◆ネットへの期待感の終焉

まずは、本や冊子を取り巻く状況について、90年代後半から振り返ってみる。90年代後半、インターネットの時代が本格化。「誰でも自分の想いを社会に発信できる世界がやってきた」と期待感を抱いた人は多かった。

「デジタル革命が個々の人の表現力や想像力を開花させ、組織に依存しなくても個人が活躍できるバラ色の未来がやってくるのでは」という無邪気な期待をもっていた」

と、この後紹介する「まちライブラリー」創設者の磯井純充さんは書いている。（注1）筆者も自分のホームページを作り、メールマガジンも発信していた。インターネットの登場で紙媒体は苦しくなるのではという危惧はあったものの、誰でも社会に発信できる世界への期待感を持っていた。

しかし、徐々に雲行きは変わっていった。インターネットは、巨大企業や政治の思惑などがうごめく世界となった。最近では、生成AIの活用が広がり、社会がどのように変化していくのかまだ分からない状況だ。もちろん便利な生活を可能にした良い面もある。

しかし、インターネットが登場してきた当時の期待感とは違う。インターネットを見ると、自分の閲覧履歴に類似した記事（フィルターバブル）、フェイクニュース、炎上や炎上商法、アクセス狙いの記事、隙あらば人から金銭をだまし取ろうとするサイトや詐欺メールなどで溢れている。個人が自由な想像力を活かして羽ばたく明るい世界が生まれたとは言えない。何を信じていいのかわからない混沌とした世界で生きているような感じがした。

「自らの存在感が、年月を経るごとに希薄化していると感じざるを得なくなってい

るのではないか。長く続く近代化の中で、個々の人々が、心身ともに豊かで安全に暮らせる社会を目指したにもかかわらず、無力感が増大していつているのはなぜだろうか？」〔注1〕と磯井さんも書いている。

◆SNSの台頭、

本・冊子など紙媒体の衰退

インターネットの影響は、90年代終盤から出版業にすぐに現れた。97年から雑誌、書籍の売り上げは右肩下がり。電車の中でほとんどの人はスマホを眺めており、本、雑誌を見ている人が少ないことから分かる。2003年には国内の書店は約2万店あったが、昨年約1万店に減少した。〔注2〕

SNSの登場はそれに拍車をかけた。Instagram、Xなどで情報を発信することが普通になり、派手な写真や記事で注目されることが経済価値に直結するようになった。選挙や世界政治の動きでさえSNSが大きな力を持っている。そのうえ、生成AIで原稿、画像、動画まで作れるようになった。インターネットや生成AIに牛耳られている中で、紙媒体の存在意義は何なのか？ 筆者は長年にわたり雑誌や書籍の仕事をしてきただけに、自問自答する日々が続いていた。

そんなとき、zineが若者に人気というニュースに出会った。もちろんまだ世間的な大きな流れにはなっていないかもしれないが、本・冊子を取り巻く世界に新しい流れが起きていることは間違いない。

それは、紙かデジタルかという話ではない。両者をうまく活用しながら楽しむという動きが起きている。

◆棚シェア型図書館「みんとしよ」

本の拠点である図書館の世界にも変化が起きている。一般の人が図書館のひと棚を借りて、自分の好きな本を貸し出す棚シェア型の図書館も新しい動きのひとつだ。2023年の本誌アワードでシルバーアーティクル賞を受賞した土肥潤也さんがはじめた取り組みだ。（本誌2023年12月号の記事参照）

棚シェア型図書館ができるきっかけになったのは、2011年に前述した磯井さんが大阪で始めた私設の図書館「まちライブラリー」だった。「本」を通じて「人」と出会うまちの図書館で、個人や団体が、自宅や店舗、病院、学校などの一角に本棚を設置して本の貸し借りなどを行う場として全国に広がっている。岩手県の雫石町では、公共の図書館だけでなく公民館でも「まちライブラリー」が開設されている。

この「まちライブラリー」を土肥さんが発展させ、2020年に静岡県焼津市に「みんなの図書館さんかく」をオープンさせた。

「みんなの図書館さんかく」では、ひと棚を月2000円で借りた棚のオーナーが自分の好きな本を貸し出す。本を借りた人は感想を書き残したり読書会に参加することで、棚オーナーや読者とつながっていく。「みんなの図書館さんかく」は、地域の人たちの学びの場、交流の場となっている。ホームページには「誰かが誰かにサビスを提供してそれを消費するのではなく、ここに来た人誰もがこの場の主人公として『参画』する場になってほしい。そして、この図書館だけでなく、まちや社会に『参画』する拠点になってほしい、そんな思いを名前に込めました」とある。この取り組みはすぐに注目されていた。

「みんなの図書館さんかく」を皮切りに、土肥さんは「みんとしよ」という全国ネットワークを作り、今では棚シェア型図書館は全国で約100館、棚オーナーは6千人を超えるまでになった。「みんとしよ」とは、一箱本棚オーナー制度を導入している民間図書館で、細かい取り決めはない。

筆者の地元東京都調布市では、市民活動支援センターに「みんとしよ」の「えんが



静岡県焼津市にある「みんなの図書館さんかく」。
(本誌 2023 年 12 月号 p14 ~ 17 「学びの場としての私設図書館の可能性」
土肥潤也 より) 創設者の土肥さんは、本誌「2023 年アワード」でシルバー
アーティクル賞を受賞している。

わ文庫」がある。無料で市民に棚を貸して、絵本のよみかせなどのイベントを開催しているが、本の貸し出しはしていない。

また、東京都世田谷区の下北沢駅近くの小さな木造アパートで展開されている「HONKE みんなの図書室」は普段は無人図書室。来室者はスマホのアプリを使用して 500 円で入室し、棚にある本を楽しむ。だれでもひと棚を 2480 ~ 4200 円で借りることができ、土日に古本市などイベントが開催されることもある。棚シェア型図書館には多様なスタイルがある。

◆書店が苦境のなか、独立系書店が生まれる

一方、書店にも変化がある。書店の廃業が増える中、2000 年ころから、本好きの人による独立系書店（独立書店と呼ばれることもある）が生まれた。書店は薄利多売のビジネス。書籍、雑誌の売り上げが減少し、ネット購入が進む中、従来の商いは持続が難しくなっている。このような状況の中で、新しいビジネススタイルで展開する書店がでてきた。

一般的な書店では、雑誌やベストセラーが店頭に並び、実用書など売りやすい本が目につくところに並んでいることが多い。独立系書店では、新刊だけでなく、古本、自費出版の本、zine など多様な冊子を扱っている店もある。店主の独自の視点で本が並んでいるところが特徴で、(株) トーハンの調査では、2024 年 10 月時点で全国に 341 店あるという。(注 3)

独立系書店の定義ははっきりしているわけではないが、大手の出版取次(*)ではなく小規模な取次などと取引し、独自の視点で本を揃えている。カフェ、コワーキングスペースを併設したり、読書会、交流会の開催、雑貨を販売するなど、さまざまな形態がある。単に本を買う場所というより

も、居場所、人と出会う場所にもなっている店が多い。(※出版社と書店の間をつなぐ流通業者)

東京・世田谷の下北沢にある本屋 B & B では、ビール片手に本選びが楽しめ、読者会などのイベントが頻繁に行われている。店主の内沼晋太郎さんは、「本ほど簡単に、自分の好きなペースで、多様な人と出会うものはない。だから、本屋は人と出会う場所でもある」(注 4)と書いている。

◆棚シェア型書店の誕生

そして、独立系書店の新たなビジネスモデルである棚貸しする書店が出てきた。一般の人が棚を借りて、古本などを売る書店だ。古本を持ち寄って売るとい形のはじまりは、2005 年に東京都台東区でスタートした「一箱古本市」と言われている。これは段ボール一箱分程度の古本を持ちより販売するフリーマーケット型のイベントで、今では北海道から九州まで全国各地で開催されている。

そして、書店の棚を貸すというスタイルは、2017 年よもぎ BOOKS による「みんなで作る一箱本屋」(東京・三鷹)がはじまりと言われている。同時期には大阪市に「みつばち古書部」日替わり店主の古本屋」が生まれ、各地に広がっていった。

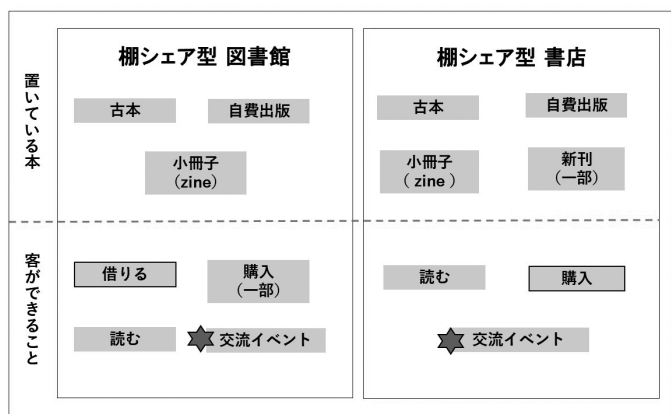


図1 棚シェア型図書館・書店の比較

今年の9月時点で全国で127店に増えている。(注5)

ひと棚を月々2000〜5000円ほどで借りた棚オーナーは、自費出版した本、古本、zineや、雑貨を並べることもあり、棚毎にオーナーの世界観が展開されており、顧客にとっては新しい本との出会いがある。また、棚シェア型書店では、棚オーナーと顧客との読書会や、棚オーナー同士の交流会など、さまざまなイベントが行われている。

前述の棚シェア型図書館と、棚シェア型書店はかなり似た形態といえる。置いている本の種類、活動内容を図1に示した。本を借りるのが図書館、購入できるのが書店というのが基本的な違いだが、その他の要素はかなり似ている。

両者の大きな特徴は、本を介して人がつながり、交流して楽しむ拠点となっていることだ。書店・図書館が本で人をつなぐハブになっている。

◆棚シェア型書店・図書館の特徴

棚シェア型の特徴を考えてみる。

- ・店主側から…本好きが運営する新しい書店・図書館。ソーシャルビジネスの新モデル。毎月、棚の賃料が入る。棚主が店番する。イベントで地域密着して顧客確保できる。
- ・棚オーナー側から…自分の作品を販売できる。趣味嗜好を表現する。好きな本を紹介して、人となつがる。作者同士、知り合いになる。
- ・顧客側から…商業出版の本とは違う、とがった個性のある本と出会える。検索では探せない本がある。作者と出会い、直接知り合うことができる。同じ作品に興味を持つ人と交流できる。

一般的な書店と違い棚オーナーの好みの

本が並んでおり、客は宝探しのようになる感じになる。インターネットでは、キーワードから書籍を探したり、閲覧したサイトの関連書籍が表示されるが、棚シェア型図書館・書店では新たな本との出会いがある。

とはいえ、棚シェア型には当然ながら難しさもある。棚の内容はオーナー任せになるために、クオリティを保つのは難しい。棚を借りている人にとっては、本が次々と売れるわけではないために、飽きたら撤退する可能性がある。棚の内容をアップデートさせていくのは大変という問題もある。

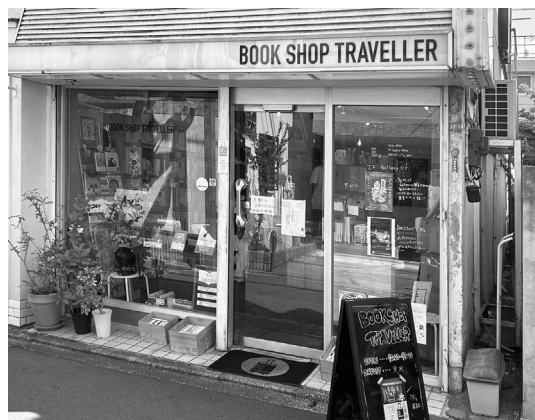
顧客にとっては、メジャーな新刊がない。棚オーナーと趣味が合わなければ魅力がいかもしれない。このように、従来の書店とは違い、店主に棚オーナーや顧客とのコミュニティ運営など、高いスキルが求められる。(注6)

いずれにしても、登場してからまだ日が浅いだけに、ビジネスとして持続していくかは店主の力量に負うところが大きいのだろう。今後、どのように変化していくのか興味深い。

「良い本屋に良い人が集まり良い場所になり良い街となる。そんな環境を作っていく中で本屋の継続が可能になる」と、東京都世田谷区で棚シェア型書店BOOKSHOP



世田谷区の下北沢駅近くにある「本屋B & B」。
飲み物やビールを片手に本を楽しめる。



世田谷区祖師谷にある棚シェア型書店「BOOKSHOP TRAVELLER」
では、2階スペースでさまざまなイベントが行われている。



世田谷区若林にある棚シェア型書店「100 人の本屋さん」は、
コワーキングスペース、イベントスペースなどを併設している。

TRAVELLERを営む和氣正幸さんは書いています。(注6)

もちろん、このような独立系書店の多くはホームページを持ち、SNSでも情報を発信している。特定の趣向の本を扱っているだけに、SNSの発信も集客のために重要な役割を果たしている。

◆ひとり出版社が増える

次に、本を作るという視点で考えてみる。印刷、IT技術の進歩により本、冊子を作ることが身近になった。

今でもオフセット印刷で本、雑誌を作ることが主流だが、デジタル印刷機の進歩に

より、だれでもインターネットを介してデータを送信すれば印刷・製本できるようになった。費用を低く抑えながら、少ない部数でも製本できる。

このことが出版業界のありかたを変えつつある。オフセット印刷、デジタル印刷にはそれぞれ長所、短所がある。本稿ではテーマから外れるので詳しい内容には触れないが、印刷技術の進歩が出版の世界に与えた影響は大きい。

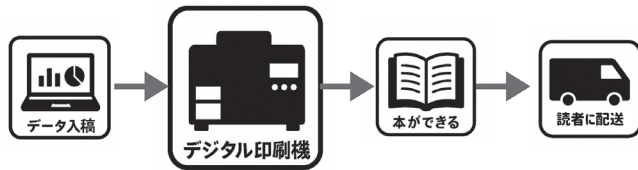
出版不況が続き、経営的に厳しい出版社も多くなっている。この状況のなか、いわゆる「ひとり出版社」「独立系出版社」から、個人または少人数で出版をは

じめる人が増えている。この動きは棚シェア型書店、この後紹介する文学フリマの活況につながっている。

以前は、出版社で制作し出版取次を通して書店で販売するか、自費で製本して自ら販売するしかなかったが、今ではデジタル印刷機によるオンデマンド出版も可能になった。オンデマンド、つまり必要な時に必要なだけ印刷して販売する方法だ。以前より安価で、1冊から印刷・製本できる。在庫を持たずに必要な冊数を製本して販売できるようになった。

アマゾン、楽天ブックス、三省堂書店などでは、このシステムを利用してオンデマ

図2 オンデマンド出版の流れ



ンド出版を展開している。購入申し込み後、印刷用データ入稿↓製本↓読者へ配送というシステムで、出版取次を通さずに本を販売できる。(図2を参照)

以前、自費出版は多額の費用がかかるためにハードルは高かったが、費用の面で楽になった。本を出したい人が自費出版することが容易になった。また、小冊子や、次に紹介するzineづくりも、ネットから注文して安価で簡単に作れるようになった。

私事になるが、筆者も2019年に個人的にアネスト出版を立ち上げて、自費出版支援や小冊子づくりの活動を行っている。

◆若者に人気の

zine (ジーン)

zine (ジーン) はアメリカで生まれた名称で、Magazine (雑誌)、Fanzine (ファン雑誌) を短くした名称と言われている。日本では、ミニコミ誌、同人誌、リトルプレスという名称があった

が、最近はzineという名称で呼ばれることが多い。

zineとは、「個人・グループが想いや考え、ストーリーを自由な形で発信する冊子」のことだ。

パソコンによる製作、手書きのもの、文庫サイズの冊子からパンフレットのようなものまで、その形態に決まりはない。

2021年3月、東京の吉祥寺でzineを作者が販売するイベント、ZINEフェスがスタート。名古屋、仙台、神戸などに広がっていった。今年1月に東京浅草で開催されたZINEフェスには約500組が出店し、約2300人が来場した。(注7)

最近では、大手書店や独立系書店でもzineコーナーをつくり、販売しているところもある。

そのルーツを探ると、2002年に東京・青山で始まった文学フリマがある。評論家・まんが原作者、大塚英志さんの呼びかけで始まった、ミニコミ誌、同人誌、小冊子、自費出版した本を作者が売るイベントだ。今では、大阪、福岡、札幌、広島などでも開催されている。

実は筆者は、2015年に自著を売るために文学フリマ(東京流通センター)に出店していた。このときの出店者は687

店、来場者は約3500人。当時も人の多さに驚いたが、今年5月に開催された文学フリマ(東京ビッグサイト)では、出店者2746店、来場者約1万1千人と10年で3倍以上も規模が大きくなっている。(注8)

文学フリマで販売されている作品は、日記、エッセイ、ブログのまとめ、小説など。グループで趣味のテーマについて書きまとめたもの、オンラインイベントで参加メンバーそれぞれがショートストーリーを作成してまとめた冊子など、多種多様だ。

小規模出版社やプロのライターも出店していたが、7〜8割は20〜30代の若者が趣味的な活動で自分の作品を販売していた。

◆作者が自著を売る

30代の女性Sさんは、日記や毎日のお弁当の記録をまとめたzineを、今年5月の文学フリマ(東京)で売っていた。「いろんな面白い人と知り合いになれるので楽しくて、はまっています」と笑顔で話してくれた。普段はまったく本とは関係ない仕事をしているという。Sさんは、都内の棚シエア型書店で好きな本やzineを販売し、シエア型図書館にも並べている。頻繁にzineのイベントに参加し、棚シエア型書店で読書会や交流会も開催している。

特集 2：注目！「シェア型図書館・書店」「zine現象」



今年5月に東京都千代田区で行われた「ひじりばし博覧会」の「JIMBOCHO ZINE FAIR」の様子。



「JIMBOCHO ZINE FAIR」では、さまざまな zine、小冊子、雑貨などが売られていた。



今年5月に東京ビッグサイトで開催された「文学フリマ」。1万人以上が来場し、熱気に溢れていた。



日記を人に読んでもらうようになり、書き方を学ぶようになったそうだ。

彼女だけでなく、多くの作者は作品をSNSでアピールしている。SNSでつながりのきっかけをつくり、イベントで実際に対面するという流れのようだ。なかにはzineをきっかけにオンライン上にコミュニティができ、イベントで対面するというケースもある。

SNSでは「いいね」をした人の姿は見えない。zineをツールに直接交流し、仲間が増える。このように楽しみ方はどんどん広がっていく。

さらにいえば、zineは手作りのため苦労もあるが、完成時には達成感がある。その力作を直接読んでくれる人に手渡すことで、喜びはさらに膨らむ。

筆者も実際に自著を販売したが、読んでくれる人に手渡しで販売したことは特別の体験だった。目の前の人が読んでくれるという喜びは、オンラインが普通になった今こそインパクトがある。

zineはコミュニケーションツールになる。大正大学の仲俣暁生教授は「SNSに慣れ親しんでいる若者世代は、不特定多数に対する情報発信のリスクを十分理解している。部数や入手先が限定されたジンは、

つながりたい人とつながるための信頼できるコミュニケーションツールとして受け止められている」とコメントしている。(注9)

SNSやYouTubeの発信は簡単にできるが、流れてくる大量の情報に疲れている人も多い。zineは手に取ってじっくり読むことができる。小冊子が多く読みやすい。制作数が多くないため、買った人だけが読めるという特別感がある。作者が見える、作者とつながることができることが魅力だろう。

コロナ禍を経て、若者も直接的な人とのつながりを求めているのかもしれない。

◆紙媒体の長所、短所

独立系書店、zineイベントや文学フリマを取材し、紙媒体の長所短所を改めて考えてみた。

〈長所〉

- ・電子機器、アプリに依存せず未来に物として残せる。電源は不要。
- ・検索で探せない。
- ・スペースが限られるため、凝縮された濃い内容。
- ・手に取って読む。手渡しできる。ぱらぱらとページをめくることができる。
- ・大きさ、紙質、厚さなどでも表現でき

る。表現の幅が広い。アナログ的な温かみがある。

- ・ネットとは異なる、多様な個性を表現できる。(ネットではルックスがよいこと、話し上手の人が目立ちやすい)
- ・読む人を、ある程度限定できる。(思い切った表現が可能)
- ・視覚、手触り、匂いなど五感で感じる。

〈短所〉

- ・収納場所が必要。
- ・キーワードで検索できない。
- ・紙に定着するので、すぐに修正できない。
- ・印刷費、紙代がかかる。
- ・紙資源の使用。

◆人をつなげるツールになる

今回、本、冊子を取り巻く状況を取材したことで、紙媒体にも未来があるということが分かった。インターネット、AI全盛の時代にあっても、本・冊子などの紙媒体の役割は大きい。前述したように本・冊子の表現力は無限大であり、だれでも好きなジャンルで楽しめる。読むだけでなく、知識や想いを書き残したり、人と人をつなげるツールとなる。読書はひとりで読むプラ

イベントな活動だが、読む本を媒体にすることで、新たなつながりが生まれる。

「まちライブラリー」の磯井さんは「本を触媒にするとお互いの心を少しだけ通わせ、開ききっかけができ、人とつながりやすくなる」と書いている。(注1)

そして、棚シア型図書館・書店が目指しているように、個人からはじまり、まちづくりになでつなげていくことが可能なのだ。つまり、社会教育の有効なツールになる。

＜本・冊子の可能性＞

個人の知識や想いを
読む、書き残す
(学び)



人をつなげるツール



コミュニティづくり



まちづくり

◆個から出発したまちづくり

前述したように、ネットやAIの影響が増大するなか、個人の存在感は希薄化している。この状況の中、自己表現した本・冊子は自己肯定感を高め、有効なコミュニケーションツールになる。

紙媒体を通じて人と人が出会い、コミュニティが生まれることは、まちづくりにつ



注

- 1、『まちライブラリー』の研究』、磯井純充著、10～11頁、211頁、みすず書房、2024
- 2、出版科学研究所の統計、<https://shuppankagaku.com/knowledge/bookstores/>
- 3、【独立系書店の増加】株式会社トーハン、https://www.tohan.jp/news/20241017_18151/
- 4、『これからの本屋読本』、内沼晋太郎著、21頁、NHK出版、2018
- 5、本のある場所研究会、<https://note.com/bookresearch/n/n41d6c3b828cc>
- 6、『さあ本屋をはじめよう』、監修・和氣正幸、167頁、177～178頁、株式会社Pヴァイン、2024
- 7、「若者に「ZINE」文化じわり。個人編集の出版物続々、大手書店には専用棚」2024年2月14日、経済産業省 METI Journal ONLINE <https://journal.meti.go.jp/p/37349/>
- 8、文学フリマ、<https://bunfree.net/>
- 9、リアルな冊子「ZINE」にハマる若者たち、SNS がない魅力とは…各地でイベント・書店に専用棚（2025年5月6日 読売新聞オンライン）<https://www.yomiuri.co.jp/culture/book/20250503-OYT1T50061/>
- 10、『本の歴史』、ブリュノ・ブラセル著、18頁、創元社、1998

参考資料

- ・特集：「本」のある町、「本」のある場所。イコール2号、デジタルメディア研究所、2024
- ・まちのライブラリー、<https://machi-library.org/>
- ・みんなの図書館さんかく、<https://www.sancacu.com/>
- ・シェア型図書館「みんとしよ」の試み、文化通信社、The Bunka News、2025年4月22日
- ・本屋 B&B、<https://bookandbeer.com/>
- ・みんとしよ、<https://sancacu.org/>
- ・えんがわ文庫、<https://www.facebook.com/profile.php?id=61559656770100>
- ・HONKE みんなの図書館、<https://honke.xyz/>
- ・BOOKSHOP TRAVELLER、<https://traveller.bookshop-lover.com/>
- ・100 人の本屋さん、<https://100shoin.jp/>
- ・ZINE FESTIVAL EVENT INFORMATION、<https://note.com/bookcultureclub/m/m9d13dab99134>
- ・印刷博物館、<https://www.printing-museum.org/>
- ・『ひとり出版社という働き方』、西山雅子著、河出書房新社、2021

ながる。つまり、個人の発信からまちづくりへとつながっていく。

みんなの図書館さんかくの土肥さんは、棚シェア型図書館の有効性について次のように語っている。「本棚という形で物理的に『個』が尊重され、『個』が発売となるから主体性が生まれ、楽しく参画できる場が全国に広がりました。僕はこれを新しい地域のあり方として提案したい」。(土肥潤也さん4月27日NOTE)

1万年以上も前、まだ紙がなかった大昔から、人は想いや知識を文字に残してきた。「ラテン語の本 (liber)」とはもともと樹木の内皮を表す言葉だった。樹木の内皮は石とともに、最も古くから人間が文字を書きつけた素材だった」(注10)

その後、インターネットの登場で激変したが、「書き残す」という行為がなくなることではない。紙に変わる「物」が出てくるかもしれないが、未来に「書き残す」ことは永遠に続いていくだろう。

そして、書き残された「想い・知識」は人生に影響を及ぼし、人と人の出会いを生み、社会へ大きな影響を与えていく。

本、zine、書店の現況取材して、本・冊子の可能性と共に、改めて「書き残す」ことの大事さを確認した。